ワークショップのかたち

ワークショップって、なに？
What's WORK SHOP
process

2

ワークショップは交流と創造の場

地域づくりにおいて従来行われてきたような行政の「住民説明会」では、住民相互のコミュニケーションはほとんどありません。一方、ワークショップでは、行政や専門家が住民と一緒になって課題を共有し、互いにコミュニケーションを取り合い、理解を深めることができます。

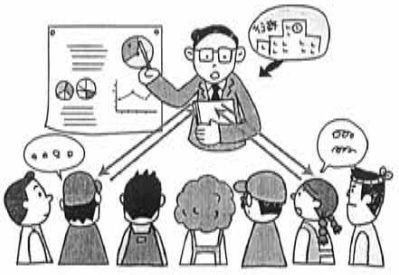
つまり、ワークショップでは参加者相互の重層的なコミュニケーションが重視されるところに、説明会との大きな違いがあります。

ワークショップでは、

行政や専門家も住民と一緒になって課題を共有し、理解を深め、新たな人間関係や地域の力が培われます。

住民説明会は、

説明者側（行政など）との質疑応答にとどまり、住民相互のコミュニケーションはほとんどありません。



合意形成のためのワークショップ

住民の合意形成を目的とするワークショップは、住民が将来ビジョン（計画）を自ら組み立てていく過程において有効に機能します。ひとつの課題でも、男女の違い、社会経験の差、職業の別などによって、受け止め方や理解の仕方は異なるものです。そうした多様性を参加者全員が認め合い、地域の実態・課題を共有し、自由にアイデアを出し合いながら目指すべき方向を見いだしていく作業、それがワークショップなのです。

そのため地域づくりにおけるワークショップでは、次の点を基本とします。

①いろいろな意見や提案をできるだけ多く出し合う。

②少数意見を大切にする。

③行政機関は、住民の意思決定の基礎となる各種情報を公平な立場で提供する。

④行政機関は、どのような内容であろうとも、住民の合意形成によって導き出された事柄を尊重する。

⑤活動結果に対しては全体的な視点から評価し、次のステップに役立てる。

トップダウン方式

行政が構想や計画を立案し、「住民説明会」や「懇談会」で“素案”を示し、住民に協力、要請を行い承諾を得ます。

住民の意思はあまり反映されない。

ボトムアップ方式

住民自らが課題を整理し、地域での話し合いを重ねながら方向性を模索し、計画づくりを進めます。

ワークショップによる合意形成

ワークショップの要“ファシリテーター”とは？

ファシリテーターは、ワークショップに欠かせない存在です。Facilitate（英語）とは「容易にする、促進する」を意味します。つまり、ファシリテーターは、進行状況にあわせ、参加者の意見を中立的な立場で引き出し、合意形成に導く「産婆役」ということです。

従来の会議は、

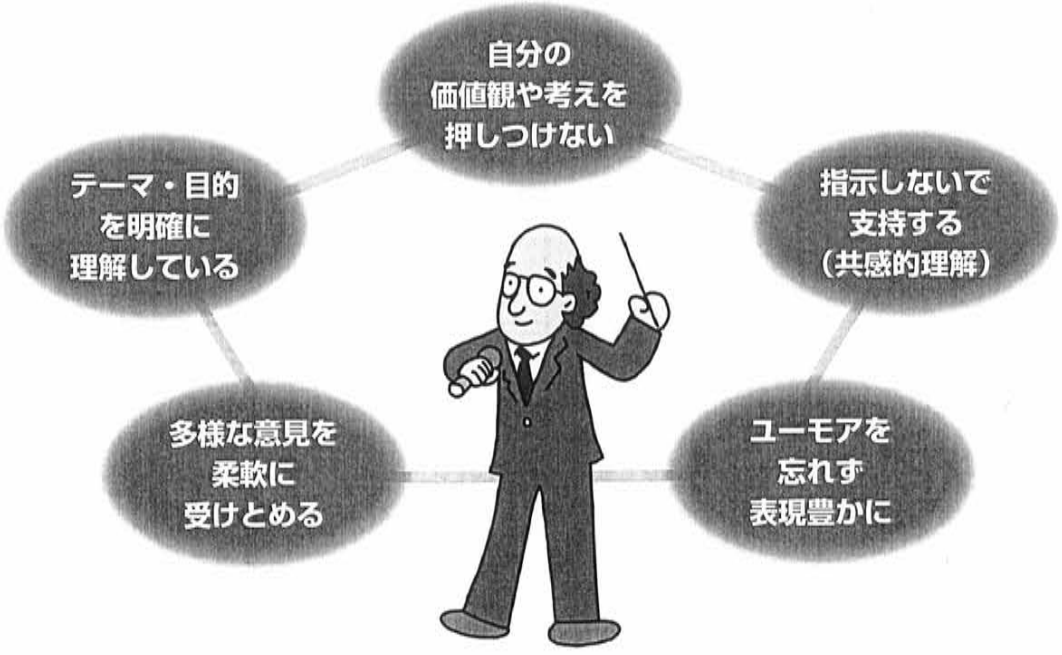
議長（司会者）が、進行役とまとめ役を兼ねています。

ワークショップでは、

ファシリテーターが進行促進役となり、参加者全員で解決策をまとめていきます。

ファシリテーターに求められるもの

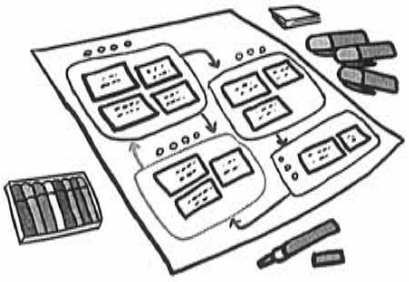
ファシリテーターには、みんながリラックスして本音で意見が言え、建設的に話し合いを進められるように、緊張をほぐし、楽しい雰囲気をつくり出す技能（スキル）が求められます。ワークショップを成功させるか否かはファシリテーターの力量に大きく左右されるのです。



ワークショップのいろいろ

ワークショップと一口にいっても、いろいろな手法があります。課題発見・気づきを目的とするならKJ法、アイデアを評価するならTN法といったように、テーマ・目的、参加者や会場によってそれぞれ適した手法を選択することが大切です。計画の段階ごとに各ワークショップを組み合わせれば、よりテーマを深めることができます。

ＫＪ法



さまざまなアイデアや意見をカードを使って集約する方法。多様な意見を引き出し、合意形成を得る会議の方法としても有効です。▶課題発見・気づき・アイデア抽出……P42-P47 参照

ロールプレイゲーム

自分以外の立場の考え方を理解するために、他人の役割を演じることによって、それぞれの立場からテーマについて考えを深め、議論を進める方法。▶課題発見・気づき・アイデア抽出

ネイチャーゲーム

自然を五感で体験し、「感覚をとぎすます」「自然を直接体験する」「感動を分かち合う」など、フィールドワークとして開発されたものです。▶課題発見・気づき

地域点検地図づくり

（集落再発見マップ）

地域内を点検し、発見した知らないことや隠れた物語、モノや人を地図におとし、現状認識を深め、解決への手がかりをつかむ手法。▶課題発見・気づき・アイデア抽出……P48-P50 参照

旗あげアンケート

相互に意見を述べ合いながらアンケートを進める手法。全体の結果をその場で確認しながら、自分の気持ちや考えを自己表現できます。▶課題発見・気づき・評価……P51-P53 参照

TN法

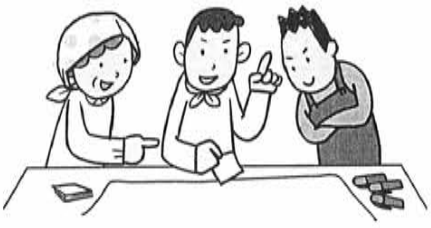
住民参加型手法を基本とした地域づくりを科学的に支援するために開発されたもので、住民の発想を抽出、分析・評価する手法です。▶課題発見・アイデア抽出・評価……P54-P63 参照

ワークショップの作業の流れ

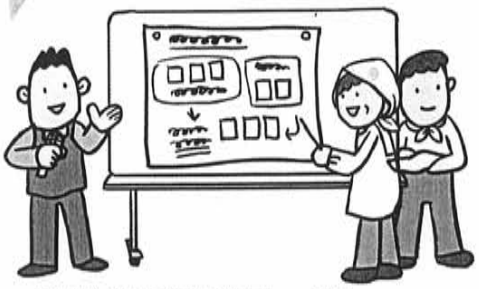
ワークショップは、参加者が五感で感じ、体を動かして発見し、認識を深めながら新たな創造へ向かっていくという共通体験の場です。その作業の流れは、個人作業で各人の考えを明らかにし、グループ作業によって考えをまとめ、それを参加者全員の前で発表することにより、情報の共有化を図ります。

個人作業 → **グループ作業** → **発表**

個人作業で自分の考えを明らかにします。



自分の考えを話すとともに他人を考えを聞き、解決策をみんなでまとめます。

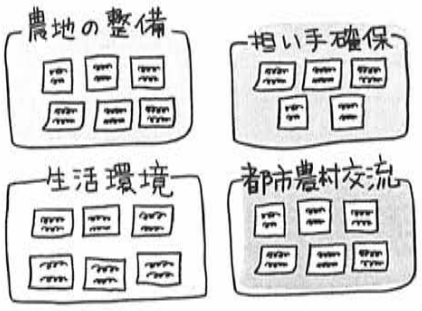


参加者全員の前で発表し、会場全体で情報を共有化。テーマを深めます。

ワークショップの表現法

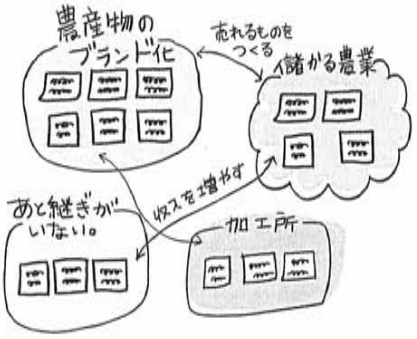
ワークショップでは、多くの場合、各人の考えをまとめ、発想や情報を共有化しやすくするため、一枚の紙（ボード）が参加者の共通のメモ用紙となります。文字やイラストなどを使って表現し、情報を整理していきます。全員が視覚化された一枚の紙に向いているため、感情的にならず内容そのものを話し合え、そして、それは参加者がみんなでつくりあげたプランとなるのです。

【グルーピング】



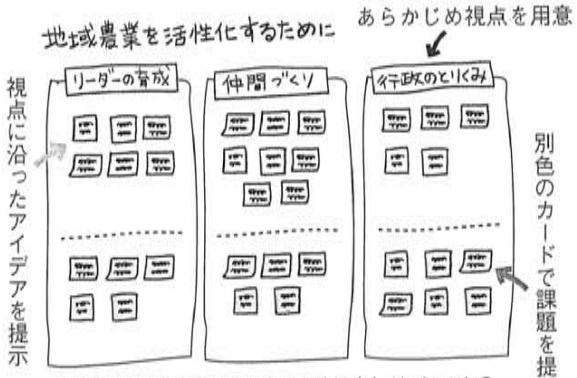
共通性のある項目をまとめ、見出しをつけてくくる

【関係結び】



グループ化されたもの同士の関係性を考える

【ジャンル分け】



的確な視点の提示は意見を引き出しやすくする

【マトリックス】

課題	取組プラン	主体	時期	協力機関
イ				
ロ				
ハ				
ニ				

いくつかのテーマを比較検討、または多面的な視点でまとめる

基本ルールを参加者に理解してもらおう

ワークショップにとって、なによりも大切なのが「参加者の意識」です。ワークショップを実りのあるものとするため、ファシリテーターは、ワークショップに入る前に基本ルールを参加者全員に理解してもらうことが必要です。

忘れないで！
参加のルール

ワークショップ 参加の６大原則

① 他人の意見を否定しない

多様な考え方を認め合う

② 全員参加の原則

それぞれの持ち味を
生かして関わる

③ 楽しさや感性を大切に

理屈だけで
考えない

④ 一人ひとりが主役

参加者の対等な関係を前提に

⑤ 自由な発想を存分に生かす

固定概念に
とらわれない

⑥ 相乗効果の妙を知る

集団作業による
あらたな創造